

This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.

1-19

II.12

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

ハミルトン市の歴史

ハミルトン市は人口廿六万五千余オレタリオ湖の西南端にある重要工業都市です。一六六九年キャバリエーラ、サールの率ゐる佛人探見隊がイロコイ土人の案内でキャヌー数艘で上陸し今のラサールパーク辺にキャヌーで探見したのが白人の足跡が一つであつた。一八二二年米英戦争起るやシヨードハミルトン一家が戦禍を脱れてナイヤガラから此所に移住した。一八三二年船の発着港として此所からロンドンデトロイト、ヨーク(今のトロント)へのステイダの起発とあつた。

一八廿六年カナダ最初の銀行や保険会社が出来、一八五三年にはハミルトンとロンドン(オレタリオ)間にカナダ最初の鉄道が開通し、それがデトロイト及びヨーク(今のトロント)へと伸び一八五九年には鉄道が発着の中心と成つた。アラシマクナブ郷は一八五四年から五六年までカナダの主相を勤め、ハミルトン選出代議士として廿六年間カナダの発展に貢献した。此人はスコットランド系の貴族でハミルトンの恩人である。デレダール古城は此人が建てたもので、今は博物館として百年前の歴史を展覧して居る。ハミルトンは五大湖から礫石を集める水利の便があるのでカナダ最大の製鉄所が昼夜黒煙を吐いてゐる農具製造会社、電気器具製鉄の二大会社を初め六百余の工場が市民生活の次水源にあつてゐる、カナダでも古いマクマスター大学があり、オレタリオ脳病院、結核病院が澄んだ空気の青苔木に囲まれて山上に立つて市街を見下してゐる。ハミルトンから東四十哩ナイヤガラ川に到る間は南オレタリオの果物地帯で桃、梨、リンゴ、葡萄の産地として有名である(一九五八)

配
所
の
月

一九四二
一
月
五

17

た記は本年三月発行の「リコー」
リエーエコー」といふ雑誌の一篇
である、

「日本人の移動問題から生ずる
、直接間接の支置を皆さん個人と
し自由、或は団体として由、皆さ
んの信んずるうとせざる要を實り
出来るの事す。

一、日本人系力十人の出版物を
流し、日系力十人に寄る記
事を雑誌とて常に彼等に寄る
問題の真相をつかむ事、

二、日系力十人を皆さんの社会に
受け入れる事に努力する事、
例へば皆さんの教養に、皆さん

の社交クラブに、或は信用組合に、
三、皆さんの近くに来た者には親
戚に名家を探し、結婚を見付け
やつて下さい。

四、日系カトリック人学生の入学に便
宜を与へて下さい。

五、皆さんの領地職士に手紙を書く
のを、戦後の日系カトリック人の日本
送還には反対し、斯る法規を作
つた閣令を取返し、日系カトリッ
ク人の権利と取返を極力制限
する新法規を取返す極力要求
して下さい。

六、何故か日感情の起つて来
るは、之れを却て抑へ、皆さん

の
新羅鐵に公平と正論を授けし
下をい。

1305
1306
1307
1308
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1400

力十外と曰ふ力十外人

(ユナイテッド・ナショナルズ・ボット)

ナショナル・ボット

最近ナショナル・ボットに就て聯合
王の誓約を承認した。其の五五
条の一部に

「聯合王はたの諸項を助長せしむ
るを主期とし、云々

(C) 人種別、性、言語及び宗教の

如何を不問、其の人權と根本的
自由の實行を一般に尊重する

る。

とあるが此れは主として力

十外人が一般に賛成して居る事

ありてあるが、而も多くの人は
力十外に居る白人を扱ふ上に、
右の根本主義に正反對の行動を執
つて居るものに氣付かぬ所がある
、此は日本人の将来及び其の生命
に關する重大問題であるゆかりを
多く、一般東洋人系の人達中、殊
今函側の右の懸約に懸念を指す
人種、男女、言語及び宗教等の別
なく、人權と自由と尊厳助長する
と云ふ宣言の誠意を如實に信じあ
く成る危険があるものがある。

力十外には敵性市民が三つあつ
た、其二つは同様に扱ひ、今一つ
あつた日本人は全然異つた所扱ひ

をうと居る。

それには種々ある場合理由がある
るが、人種偏見を主張する
動機もあり、又今後人種偏見
の最大理由であることは疑ふの
余地のないところである。

人種偏見はこれは今回ドイツ系と
日系との取扱いを比較して見ると
明瞭にそれが判つた事がある。

ドイツ人の場合、一世と二世は
畫然と取扱いが別で、ドイツ臣民
は不忠誠と見たり直ちに投獄した
が、二世は全然お構ひなしで、力
士の無罪に手解するし、何等
市民としての差別待遇を受けずか

③

つたものなり。

それによ日本人の統制の出発点の
ものは^{あく}強固したるは勿論、それば
かりにはない、日本人の血を通つ
て居るものは全部、帰化人も力十
分なれども全部を、西部沿岸から遼
東に出してとらうたり。

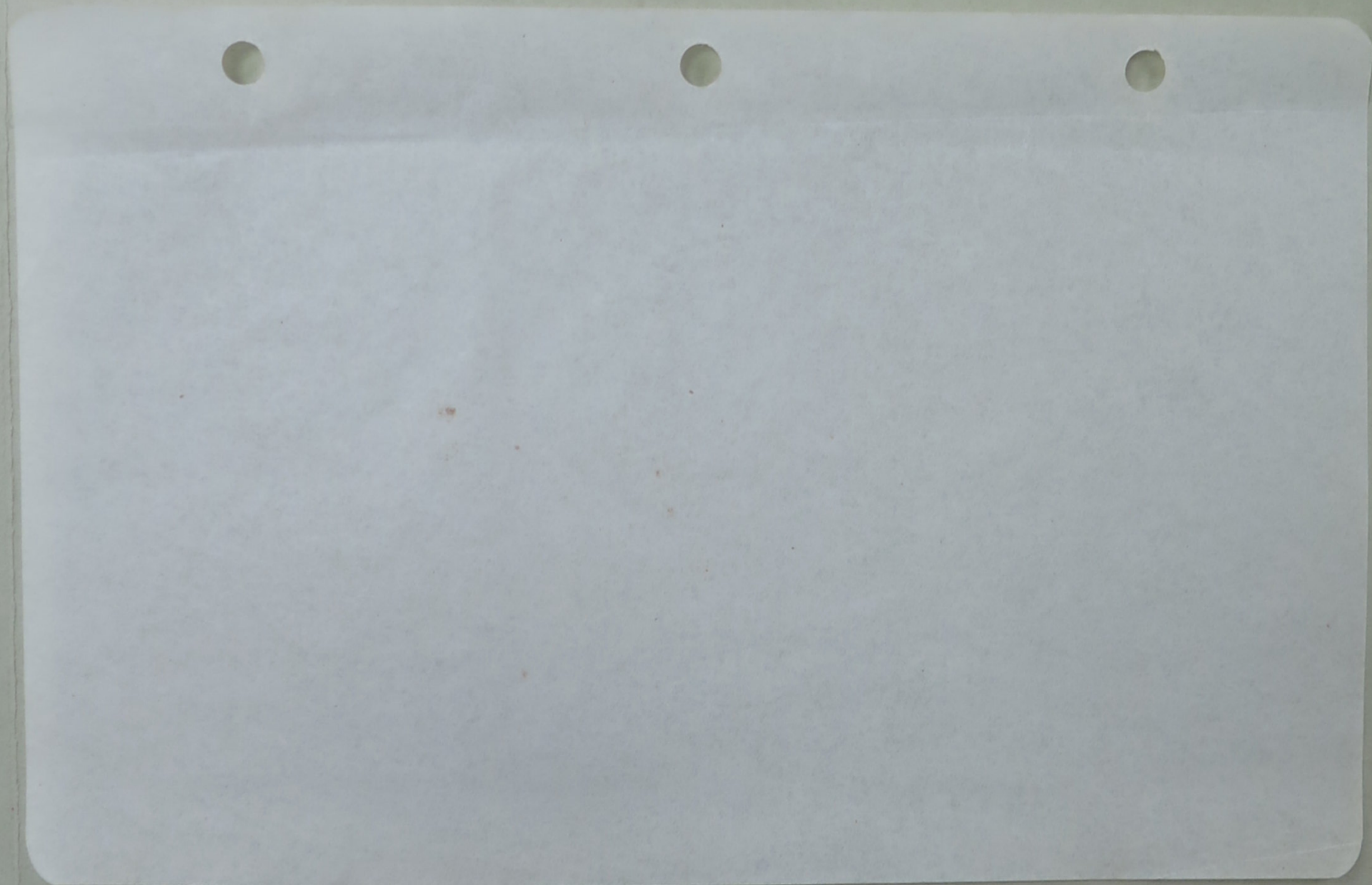
彼等へ生業は閉鎖された、彼等
の土地、不動産は賣られとらう
た、彼等へ兵隊を彼等押入れた
、彼等へ食料は押入れた、彼等
は自由に旅行するのを禁じられ
た、彼等へ悪習慣の標的にされた、
こんな取扱ひを受ける者は自然に
彼等は敵国人として猜疑の的に成

つて居ると感ぜ、随つて将来に非
し不安を拂つるは自然の道理であ
る。

彼輩(二世)は他人種のカナ
市民と同輩カナ市民である中
實に金無きれり居る状態あり
云ある。

或る閣令(1912年8月3号)に
は露骨に法令の目的が表れを
る、即ち凡そその日某人は全部敵
と見做すと言ふ事が明記されて
る。

⑤
又た一九四二年の四月の閣令
三二一五号には州政府との約束と
して、日本人を戦争終り後まで



一旦轉位され左邊から他へ移動せ
らめざるを明記して居る。

此れは、若し「力十が市民」と

言ふ言葉が何等かの意義を指し言
葉とすれば、斯る命令は實施出来
る筈のありとは無い事は明確あり
實ふの事ある。

力十が議會より海外に旅を敵愾心
に燃えたる人々から、日系人は
帰化人も力十が彼れを区別せしに
力十がかり全部を追ひ出せしと
し言ふ人達の理由の大部分は、

日本、軍部が成した等の数々の惨
虐行為の責任を力十が彼れに
日系

人に負はせ居る様である。

所が誰もドイツ軍部の威した非人
道極まる野蠻行為の責任をドイツ
系カチ知人に負はせし西外放逐を
呼ぶ者は一人も居ない。

誰かアメリカ軍のアイゼンハワ
ー将軍がドイツ系があるか、総指
揮官を^{四羅}めさせろとオランダに申
した者のある事を夢かぬ。

アイゼンハワー将軍はドイツ系
にも不拍、偉大なるアメリカ人と
して認められ、自由を好愛
する愛の市民に依つて崇拝されて
居るのがある。

金体、カチ知人種あつてもうほ

此の世に存在し、そのものである。

⑦

西洋の各白人種及び東洋の各
人種が集まつてカチタ人民と云ふ
ものが構成されてゐるのである。
たゞカチタ人の一國を其の種
の故に差別待遇を蒙るゝは、そ
れは直ちにカチタ國民の分裂を意
味するものである。

若し中令自は、日系カチタ人が
差別待遇の目標と成るゝ、明日
は、他の人種が排斥され、斯くて
カチタ市民は恐怖の中に生活せね
ば成らぬゝに成るのである。

パールハーバーの襲撃後、アメ
リカ政府はカチタを爲した様に、
日系人を西海岸から全部退却かし

た、僥と力と勢とは彼等の財産を
賣つてしるうたがアメリカでは賣
うあつた、而もアメリカの大審
院は、日系人を特動せしめたるは
米国の憲法違反であると判決した。
初めには少し憚着であつたが、
米国の日系人は陸軍へ他の人種と
同様に入営を許した、西欧に戦線
に又た極東に於て彼等日系兵は美
戦に偉勳を樹えた。

スチール工兵大將は嘗て語つた、
「彼等日系米人は彼等の血を以て
と米国の大さか一花を買つたのだ」
と、而もアメリカの政界及び軍
部當局は承認しを曰く「日系米人

は他人種と同華系市民権を持つ資
格あり。西部沿岸の故郷に帰り度
い者は自由に帰つてよいと

極最近迄吾々カチオは日系カ
チオ人に入隊を拒んだ、彼等の大
勢はカチオの爲めに戦はんと希望
したのである。

しかし尚カチオ等は日本人の在
任について戦後中絶期限に戦時の
制限令を實行せんとする所なので
ある。

日本人二世も含めて、多くの心
ある人々は、従来西部沿岸に於て
在る日系集居の群衆生活は避けた
方が好いと考へて居る、彼等は他

の地方に定着する事を奨励せ
可きである。

だが力十加カモクろーとあ
る限り、これも自由意思に依つて
行はれなくては成らぬ、決して何
政府や市町村で、日系力十外人が
好む所へ行くのを制限したり止め
たりする権利は毫かる可きである。

最近の誤りから見た方策、

最近起つた變の留學つた而中、

迷はす標の方策は、日本臣民と力
十外人を同様に取扱力十外政府
の費用で日本へ帰国を希望する者
を表彰する類案の一件ある。

労働者と騎馬遊隊が、そのを兼

安否、報告用紙を添へて即ち署名
名をさせた責任者ありとあるが、
彼等は如何なる方面へ由決して孰
れと股は取りあつたとは言つて
居る。

政府が決定した方策を遂行して
ゆく上に於て、其衝に當る官吏は
一般的には公平に正當にやつたに
あらずして實の極である。

それは其の相手の人達あり、自
然に起る愛の不備、反抗が起る場
合、僻に誰いかは吾々としを充
分同情はする。

従ふが、此の報告を披示上に
於て、實際の強制圧迫は如何にし

ても、パール・ハーシー以来の、
日本人に對する萬般の仕打ち等の
ものが實に大なる圧迫であつたの
だ。

實際は露力十外人として、斯る
絶望的取扱ひを受けては彼等は
力十外から勸進されて居るとは考
へられまいし、又左將來安全を、
而して幸福な生活が出来るとも考
へられまいしではないか。

だから二世があんなに多勢日本
行の頼みに四苦八苦したのも、何れ日
本へ歸りたい為めではなからう、力
十外人が与へた差別待遇、不正
、及び憎惡の宣傳等から、暗い

絶望の将来を見越し、心ふらふ
署名したもののとあるのは疑い余地
なき、而して今その取捨しを預
つて居るものがある。

此等已に起つた過去の事柄を綜
合して観るに、彼等の取捨預は
多少とく許可せる程考量とあり、
而して今後は彼等は力十人とし
て全的に受け入れ、彼等が力十
外の生活に於て市民として充分
なる国家への貢献が出来る様に總へ
その概念とあり許可とある。

正義と力十が市民の根本的権利
↓を考慮する以外に、力十の名誉
及び東洋との将来の外交関係から

欠乏も、そうと受ければ成るあり
の事ある。

日本へ帰った日系カトリック人が、
カトリックである総督と不正義の根
拠の増悪の念は、生じた現実で、
日本人ばかりではなく、全東洋の人
々に「カトリックはキリスト教国であ
る、カトリックは王政である」と
言ふ結果を招き出さるゝ事がある。
それ故、各個人、教団及び他の
諸団体も、あらゆる方法で講じて
政府をより上進の事柄を断行せし
めなくては成らぬ。

オタワの集會を日系人問題

再調査要求

一九四五、十二月のオタワマカール
オカサール

オタワのデモニカルスライムの講
堂に於てトリート大学のサヤビス
、マカールサール教授の講演後、場
場一致して日系カサールの日本帰
国についての決意を再登録す多様
可を求へよ

この決議文が通過した、即ちそ
同決議文に、残存する日系カサ
人には全市民権を求へよと云ふ
ところ。

教授の講演後同時に聴衆席
から提議され決議文は次の通り

を要する。

「トモニオ」政府は日東力十の
人の日本行きに關し、従軍の自由
意思を妨げない様に従軍の決意を
再登録せしむる事、而して力十が
に帰国する者には市民権全部を附
与す可し」

右の市民大會は

オタワ公民議會、及び力十が聯
合會協会の主催の下に開かれた
ので、教授は議長、そして力十が
士へえ、全国教會日本宣教師に
招待された壇上に立ち、賛同する中
はマギル大学の社会学教授下も、
力十がオレイト博士の文壇を受けた

「日系力十外人」の題下に
「力十外人の政策は正義か人種偏見
か」と呼び

「これ迄に力十外人、政社及び市民
は此の日系力十外人問題の難問
題に逢着した事が無い、今吾々は
之れを解決しなくては成らぬの
だ」

要分二十五万人の日系力十外人
の運命は天秤にかゝつて居る。

我々等には、人種偏見がウレ

「何故の日本人、又即ち東亞の
人に向けられて居るが、香港の陥
落以来、此の人種偏見は日本人に
だけ集中されて」と教授は云ふ

左の階級は曰ふ力十外人に對し種々の要宜得を求め廻した、而して一般民衆は其の流言之真偽を調べられずに之れを信じ、此際日本人を追ひ出せといひ張り立てた。

左の団体おと公衆の輿論を左右する程あるは許す可からざる事のある事。

此の少數民族の問題を扱ふ場合は、正義が之れを指導しなくてはならぬ、而中人種を基礎として扱はる可きものがあるといふ事があるといふ事がある。

一九四五年十一月廿日

ワロウズ人残

在東京、マッカーサー將軍よりオタワ政
府への通電に依れば、船腹を得られ
次予力からの交換民を受けると
今日労働大臣マツタニ氏より下院に
報告があつた。

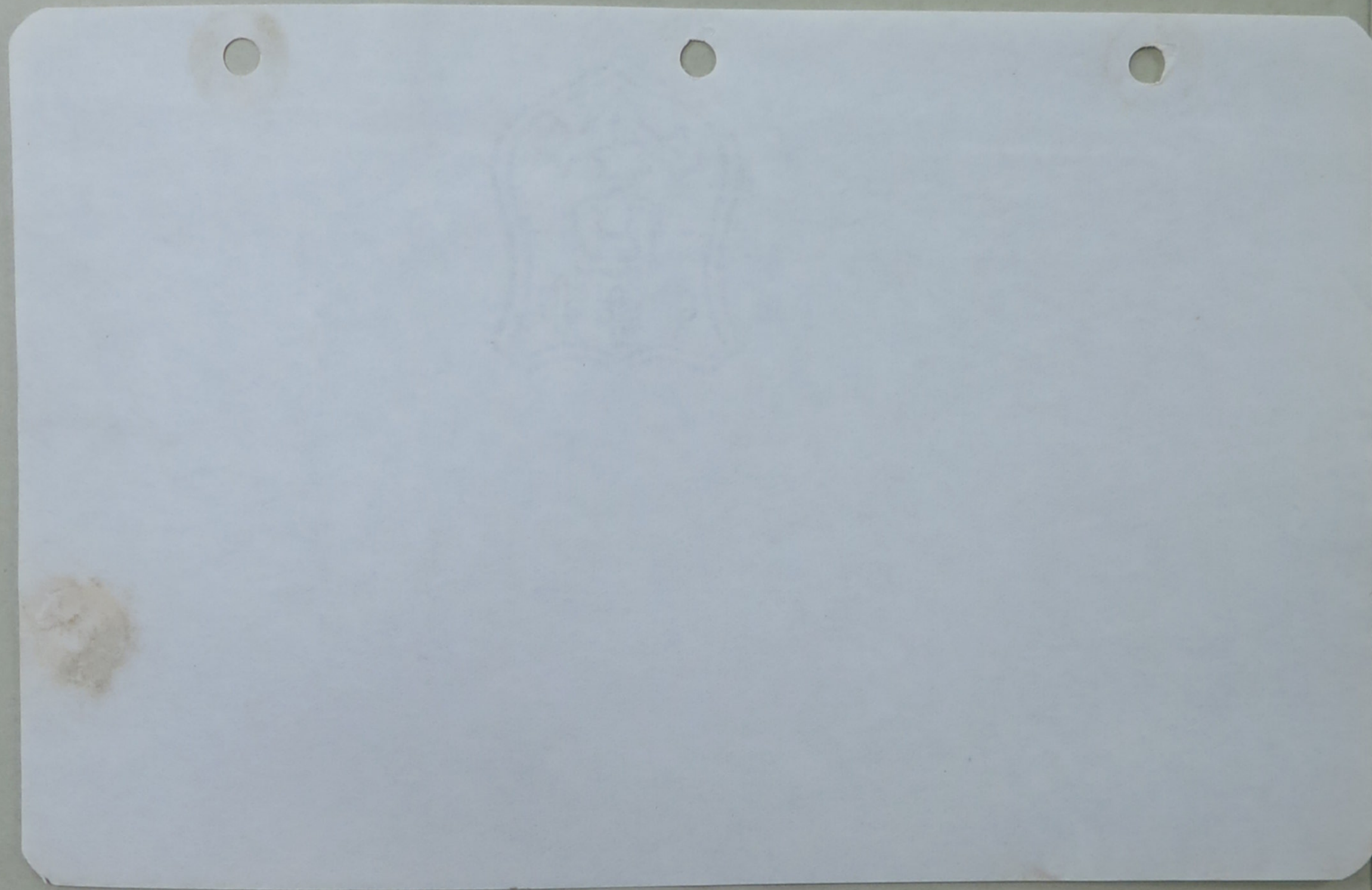
岡大臣は言ふ、日本人二世にして「
日本帰る欲ひにサイ」したる者と
日本降服即ち九月二日以前に出る
以て取済方を預ひ去る向きは之れ
を許す、但し其数は極少数である。
日本降服後大勢力の者がサイを取済し
を預ひ去る。

政府は日本人二世がサイを取済し請

サイを取済し
政府方針

政府の方針としては、過去に於て
る（わけ）は日本人の大佳邦生活
が鬼角ツラブルの素であつたに鑑み
將來はそれを繰返さぬ事を決
心すると同大臣は語つた。

下俣、これ迄にヤシキ多相が声明
せられた如く、日本人は不
同化の人類
にはあるにしても、今迄に不忠誠の
行為の無かつたもの、及迄の意圖を
持たなかつた者に対しては、力ずくは
どこから公平と正義を以て扱ふに
あらず。



夕レノ轉住所

夕レノ轉住所は沿岸防備区域か
と百里外の各地轉地轉住所の中に
沿岸に一番近くて、日本人轉住所
中の最大なところ、轉住所生活の
一般を記す好適の代表地だと思ふ

ハニクーバ港から、カチカ太平
洋鉄道と九十七哩の山脈あり、
トラウクに揺れと十四哩山脈
を東南に走ると、三、四百英加の
牧場があつた、其牧場を政府が借
り受けと、日本人の轉住所を造る
たりある、附近に白人の住居は
多く、日本人ばかりの此村は誰に
遠慮もなく、と言つて嚴めといふ

②
此處の監視を受けて居るが、
日本側は田舎町を思はせる。五月
の節句の季節には、誰か持つて来
たか鯉のぼりが一本青空に流れる
あちらにも、こちらにも大まいた
り、その如く揚り下り、通行人は
政務の役人か、日本人ばかりであ
る、

政府では、生年年齢十八歳から

四十五才迄の男子を、或は道路工

事に、或は東部に移動させたのを

、家族が転住所に送付くと、ほう

ほう家族の許に帰らせて、働ける

男子には薪切り、製材所、農園部

と一時月二十五仙を付与する、

老人には風呂をとり、ラッパ掃除を

どの事業に力を入、女の子し
の家庭では、賣店、賣子、労働
き、^{六人}四有数人の小学生の臨時に
山井の女教師、看護婦、助産婦などの
仕事をし、鬼も南一家が生活出
来る程に、と号れる。誰か働く人
の多い家庭では、政府から、牧場を
与へるのがある。

夕之ノ新住所は新たに四万五
十坪の假住居を新築し、家族十
を住せ、独来者は、牧場の建物
を改造して二百名以上を住せ
てある。一九四二年の九月末迄に二
千七百名の日本人を収容した。
此れだけの人口を持つ町である

① 第一、事務所、日常品の賣店、肉

制所

郵便、消防組、テレビ、電燈所、
水道、大食堂、病院、荷物出と入
の倉庫、自動車修繕所、鍛冶場
木工場、風呂場、便所、その他政
府の役人達や宿る寄宿舍等々一
町村に必要な生活施設は全部作ら
れたのである、それは皆日本人大工
、鍛冶からストーパの修繕迄皆、
日本人の職人が建設したのである
勿論政府は紙給を拂い、修繕の生
活費に当てしめた、

何由生活上に不自由を感じたか、
村に出来たか、子供の教育には水
常に不自由を感じたから、何レ
ろを訓練する世娘が教へるのであ
る、いたる盛りの生徒は先生を

を困らせた、鬼中角小学校に新務
教員大けは得安安室合の方で、曰
本娘の母教師に三、四十冊の手書
を給ふ、一時は六百名から居た
子供の教員、^{をい}方第者の女教師、
不完全なゆ、牧場の大建物の二
階に窓を付けたり教室を仕切りレ
たり、暖室設備したりと、電氣
を付けたりして曲りありにも学校
は出来た、

⑨
修めした臨時学校が各居住地に
出来たので、少くも心の視学が
が應援に来て夏季講習会を開いて
速成教師の養成につとめるとい
た、其れ等居住地の学校の指導役
に街頭女子さんと言照子さんと

ふ二人の師範学校卒業生が在り、
各籍地の子校を廻つて、教授材
種や、級組織などの指導をして居
られた。

困つたのは中等教育である、籍
地には中学、女学校程々の学校
は無い、中等教育は国民の義務教
育といふから、保安委員会の方
では何もしないで居る、子供は慢
々成長する、一番社会的悪感化を
受ける年配の子供達を教訓せしめ
れば、少年犯罪者が増えるはあり、
日本人側では愚案に暮れを居た、
それを知つて、温かい救済の手を
差しのべてくれたのが、カナダ会

(6) 国教会や聖公会、キヤリリック教

今までの宗教団体であった。

教育家と宣教師たうた人達と

とて大学出たの先生を、教会側

と給料を払ひ、日本人側が保安委

員等と関係して教堂だけ何とか静

かして、^{世に}授業をして貰ふの事ある

が、政府側は特に教養を修つて

来る事がある。空々室があれは使は

れと等々^{位か}程あるの事あるから教授は二

部、三部に分けてあるの事ある。^{端に不便で}

タレメ大けでも中等生が二面

名を突破し、大学出の先生が四、

五人で、機能的に働いてくれる

、日本人一擧は、いくと感謝して

由是よりあるの事ある。これ等を

月謝するの事ある。^{力加、タレメから、衣類を集めて}

第一着に送つたのは、等教師の指導する

中等学生達であつた。

已後中等学校の在る、アムハタ
川の砂糖太根耕作等地に行つた人
達は、子供を連れて其の地方の中等
学校へ入学はさせて貰つたが、親
戚は一人の子供に一月五希、七
希と月謝を納入させられたものゝ
ある、中等教育は義務教育でない
から此等金銭の要がある。

夕ノノに来て居る人々の中、老
人、子供以外の男子は薪依り（実
は自分等のたぐ薪を伐たう）である
が、や、農園仕事に出るものがある
が、二十五仙の給り働いては損
だ、とか「仕事加早くすむ」と言
つて調子、別に何か新しい考案が
ついて居る訳でもなく、自然な掛け

勝ちに成る、中年以上、労働界に
経験ある者は、それによつて
と、十六、七才から十歳前後の
と、に移動して来て、初めての労働
する少年の爲めには、ヤツト走
る程、悪い習慣だと思つた。「他
うと励む人は心力で、陸上ける程得
て来る」と考へる程に成る事の爲
めとさよ。

⑨
夕之十時住所には日本人醫師一
人、白人醫師一人居て交代で患者
を診て居る。官費のボクサーはあ
るから、子供がシヤとあるとヤ
レボクサー、腰が痛む、サレボク
サーと、平常あり、余程の重態を
患つてボクサーを呼ぶ若い人達も

夕し夕しは、トク夕しに往診を乞
ふの玉結つて見ると、患者は将棋
に夢中になつて居た如く、トク夕
し由力く
憤慨と居たるもあ
つた、

非常時たかゞ居るまいとは言へ
一軒の家を仕切つて二家族位もせ
一個のストーブを使用せしめる程
に居たるは、保安委員会の^諸書記

とあつた、入る時は、知り合ひ、
親類、父子、兄弟、などが相談づ
くして一軒の家に入るの事あるが、
日常の生活に、個人的^的内所の自由
が無い、子供がどうしたの、お客
さんが多いの、どうなのこつのと、

ウステリを越して、十中九軒事だ

は仲間の人かか起る、

此の轉住所が出来ると言ふ初から、
日本人の事務所が出来て、英語と日
本語と二人の幹事を置く、日
本人一同と政界官憲との間の交際
聯絡の供をするところ。

家庭會議や仲間割れの會議由式
の事務所へ持つ込む、其の應酬や
解決が、英大抵の骨折りを何處か
へたすところがある。

又その四角半に十街に分れて
立ち並ぶ所があるが、各街に日中の
隣組とマネたものあり、課所と
上着下着、下着上着の機噺にと
ちがふ、回覧板は班常に便利に使
用されるところ。

(12)

タシメには執事少シク心算、新
光社と云ふ活動家系の専門家に露
木海龍君と云ふのが居る、曰わぬ
の、フ井ルム二十餘巻持つて居り
、カチタのフ井ルムは其の都度借
りしめるのと、一ヶ月に二回、即
ち二週間おきに活動家系を繰し
はかすのとカチタのを交互に見
せぬこれ無聊は甚しむ特任所出流
の太々赤尉安あつた、

十仙均一の入場料は、曰わぬ
和食の費用に當る、露木君はあ
の機械の損料位ひを奉仕しとくれ
た、斯様二年間に、曰わぬの、フ
井ルムを檢閲され、大分知り取り
れり、是等のものは没収の厄にあ

うたのは気が毒だつた。

春にも成れば、一家族に一区域の野菜畑を与へ、種々の野菜物を耕作させる、此れも淋しい耕作所の慰安であり、自家用の野菜は殆ど不自由な所だつたやうである。

青年男女が、夕レノ青年会を組

組し二三名進んで二世が年一、

二回つゝ、慰勞演藝会や芝居をやつ

て金聊と慰めたり、敬老会をもち

り、青少年指導の会等に有益な仕

事をした、其の顯著な事は青年

会主催のカー、スカウト運動を

あつた、好い指導者もあつて、元

気なあれ、積もれば、よからず成

熟した、深み易い年次の子供を、

愛と正義と勇氣と規律を以て指導
したるは、轉位所生活中の青少年
の爲めには、他の如きある團體社
會運動よりも精神的効果は甚大で
あつたと思ふ。

子供の精神教育ニ事なりつゝ既に
タシテ四、五の子供の精神教育
にツイテ書擧へて置く。

タシテにはカシメ会同教會、聖
公會の二教會が、それ日本に永
年宣教に従ふて居た日本流のよ
く出来る教師や宣教師が轉位所に
派遣され、五才以下の子供の爲め
に幼稚園を經營し、毎月謝金百八
十余名の園児を收容し教師も費
用の負担を二教會協同にやつてく

れ、毎日曜日には教会の日曜学校
を、それく、教会堂と子供の為
めにやつて居る。

外に佛教会も在つて日曜には、
佛教の日曜学校もやつて居る。

大人の爲めにも、合同教会、聖公
會共に日本語の説教があり、佛教
中岡教師が居て定例説教をして居
る。

15
人間の位に必要な社会悪が影の
如くつきまとつて居る。其の
や、一定の職ある、家族扶養の責
任をなさねば、妻子は日本に在
つての集まりでは、必すトラス
ポ、花札、サイコロなど、
おどろき半分から、本物に成り、

幾千帛もの汗の結晶が暗から暗へ
とかき集められ、帰玉の費用は政
府が持つてくれるにせよ、日中
へ上陸した昔日からバコ銭に由
事缺ぐ人が相当数ある様である。
此へ来やくざ遊びに自分も、西
の妻子も敗戦の祖国も忘れた人々
は別として、三年の永い歳月を、ど
うして時間潰しをしたか、その
いを見る。

元気のよい婦人連中は春、夏、

秋、好天氣に家の仕事以外に仕
事は無いので、野外に、葺取りに
、夕べおおの花摘みに（お酒の出
来るまで）野牛草摘りに出か
ける、移動第一の春には附近散り

17

次ぬの野生の牛蒡が種切れに成つ
たのを始めとし、日本の各地方か
ら来た人々の集りがあるが、其
故郷の野生の草を食用に成るもの
を一人が採取して来て喰ふと、
夕之メ中の婦人が出かけると言ふ
鰯、夕之の菜の酢味噌、ニワト
コの新芽のお茶代用草が流用した
頃には、数哩の道路側にあるニワ
トコは、キレイに坊主に成る、ワ
ラビ季節には十哩位ひもトラツク
と遠征する、勿論近人には取つて
ある。

山の中の沼地に野生のフキが生
えて居るのを男が見付けると直ち

に根こそぎ取つて来る、松茸も此
の附近の山の、あそこ、こゝに少し
かゝる、出来るのを誰かで見付けると
男が、腰辨當で十哩十五哩の遠
方迄出かけて、根こそぎ取つて来
る、

移動の二年の春、山の雪が解け
ると、山の中を漢り廻る、此辺の
山中にはユークド（何人かは赤木
と呼んだ）といふ堅木があり、皮
めは白く、中身は鯉節の櫛と赤い
色をした木が、雑木に混つて所々
に在る、それを一人が取つて来て
枝とか、花活けとか、煙草入れや
灰皿、其他雑多、赤牛細工を作る、
中一様、由八や比呂、それを飾める、何

しろ仕てお仕立てもよい柳^山花
子のひまぐに招きに来させて採
しそ来るの玉、忽ち歳面英加の雑
木林から赤木の姿が流れてしまつ
た、次ぎはノールと云ふ楓の一
種の株のゴブを採して来て大鉢、
額あり、花洗け、写真入れ、茶^茶ぼん
茶子鉢^好等々、昔の日本より骨とう
~~好~~が、^好から玉金を出しそと珍
物が出来て居る。

一九四四年、秋、日本人親和会
主催の、野菜^{野菜}や、手^手藝品^{藝品}や、種々
お釋藏品の持ち合せの展覧会を開
いた子があつた。其時此の木^木の根
細工には實にスバラシい出来はえ
の品あり、白人が能く心^心をこめて

ハカク字を撮りに来た程であつた

。 鉄道沿線のホーノ駅から十四

哩の山の中にあるが、何の爲めか

、日本人は銃釣りを禁止され、所

で、儀と山の中央の小川のあちち、

こちらの藪の中を番を立ち、すは出来

た、強と子奥の居た、信に成

る、永いすもあつた、

廣の牧場に来る、幾十種の草

で、此の草で喰へる、アノ草で和

昔の地より喰へると言ふ風に、

喰へた、草は強と信に、

、局で喰へる、草で、

木の實で、野生所附近には全然

なくある。

此れは食料の欠乏を味意するのと
多く、退屈から生活の変化を要
求する為めありとある。

サードと言ふ所にはフルーベ
リーと言ふ一種の草が山に沢山出
来るのと、それを摘んで白人の店
に賣つて一夏に百五十万円儲け
たと云ふ話ともある。

修養方面では、婦人達が造花、

裁縫、料理などの講習を^{受け}、^{女子}

裁縫の習得には非常な便宜と暖
加をへり出た訳である。

悠々とした閑人の寄り集りである

から、俳句、碁、将棋などは實に

盛んであつた、敗戦、降服を笑ひ

そ、

21

来る春に東北の芽も冬と視るがふ
と嘆いた旅人も居た、

食料問題

問題は否々の所あるが一通り
轉位所の台所まの所いゝ見る、米
は日本人の常食であるから米西政
府と力十の政府とが相續の上と

在り曰本人一ヶ年二百七十五年平
均で米五の^分輸入して^分米五の^分輸入して

主として居た、たかゞ洋食と、日本
食とで何れも不自由な位に配給
された、蔬菜類、味付け用の日本
品は全然乏しく成つてゐる所、太西
洋^{ib}岸^{ib}に獲れる海老と^干蝦^干を又那人商人が

5 買った^{たり}一斗一斗十仙^アメ^リ
カの又那人が^ア作つた味の素^アと

と牛に入れ、一番大切味噌、
 醤油は其方の専門家が夕メ特注
 所に來て居たり、政府に頼つて二
 軍団には、立派な味噌醤油の出来
 他の特注所へも送り、東部へ分散
 し、居る日本人から注文を貰つ
 て、夕メから送つてやると言ふ
 風で、此の特注所は日本人
 は非常に之れを重んじたものであつ
 た。

一九四二年の春、日本赤十字社
 から慰問品が來た、即ち「祖玉の
 香り」、味噌、醤油、茶が分配さ
 れた、其時は皆大騒ぎであつた、

（23）
 多くの人は常食には勿体ない
 と言つて、在野に新米の來た時だ

(24)

け祝いの香を去ると言ふもの、お
蔭の入つて来た赤十字マークの付
いた紙袋を神棚に供へて拝んたり
した者もあつた。味噌はエキスに
した黒砂糖の塊りを少し削い
配布された、誰かアレナ新式味噌
を見た事か。いの子供がキヤレテ
ーおと思つて、ほうばり、泣き出
しちと言ふ笑話も残つて居る。
何しろ「祝いの香」は元々二分に
味はれちやあつた。
窮乏れば通ずると言ふが、移動
の時に持つて来た田舎は全部使
ひ果してしまつた。味噌や醬油は
計ひに出る程に成つたが、田舎
人はお客あるとかいふは、
ううう

辨言には、り巻物し妙なりと
 らぬ、大切東海苔が安い
 の要所が居て、力うそ某の漬物を
 廣くけりの代用にと巻いたのを
 見ると一見海苔と変わりぬゆゑか出
 来、それと全タミナの一り巻問題
 は解決したものだ。だし雑魚が安いので
 太西洋岸で獲れる干海老を支那人の手から買って
 力十ダニには東京都に、大豆が出来
 るのと豆腐や油揚げも、個人的に
 作り出し、とうとう商賣にあてず

44
7
4
2
-
5
3
1

百者由去來た、
那住所鎖部以出

鍋焼うどん
可也
原典
表はれ
たり
些

う
ん
ん
可
ん

く、表はれ
たり、
止上

11 米を ^買 買ひかへて
化学工作を起す

七
八
九
十

化学作用之

世
の
研
究
に
お
け
る
成
果
を
、
此
に
お
き
て
、
山
中

研究
12
成

印
レ
三
、
此
變、
山中

の
轉
位
何
に
も
し
た
東
京
の
出
現
と
そ

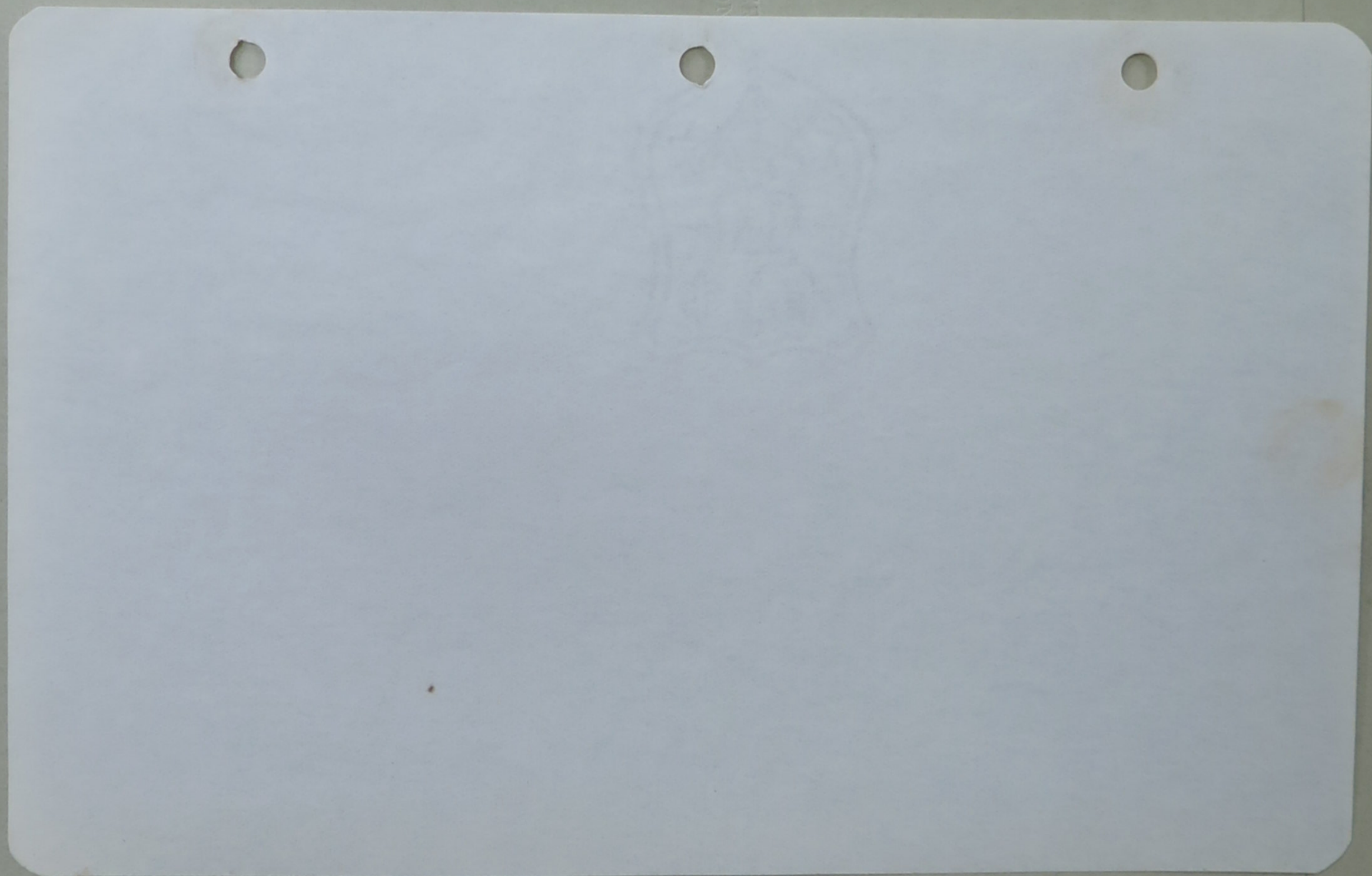
經
12
12
12
12

東京の出版とそ

うふ、
執力、
タマ
には
マ
グロ
の
刺
文
が

執刀、
又
又
に

ほ
マ
グ
ロ
の
刺
文
が



夕シノ轉住所の一風景、

夕シノ轉住所に謂所独身者大け
を経來せし居る家屋が二ヶ所ある
私の知人も其所に居るの如し私何處
々其所を訪問する機会を持つた、
独身者と言うても「現在家族を^同伴
はせし者」で、彼等の多くは故郷
に妻子を歸して、独り残つて獨り
に居る人達が多いのである。

①
中に私の知つた人七十才に
ある老人が居る、此の人は私の同
郷の人であつたが三十數年前に
故郷を廿五歳の嫁さんを貰ひ、一
月同棲した後渡米し、それ以來一
夜も歸郷をしなかつたと言つて口

しあひ人が居る、私が一九三九年
に故郷を訪問した時、六十近い老
婆が其の良人の兄と言ふ七十五、
六の老人に連れられ私を尋ねて来
られ、涙ながらに頼むのをあつた、
「弟はコレと結婚して僅か一ヶ月位
からアメリカに行き、どうもアレ
たゆりか帰つて来ません、去つて
はたまたましゝが牛紙の中に入れて
、それにコレ（弟嫁）は正しと空
閑を守り通して世帯主、と力に
由女牛一人と若い中に閑坐して植
え付け、今では夫婦暮しは樂に反
へるわいの収穫がある位に働い
たりと喜んで来た、私の中よりにし

(3)

と左の岸が成功して大々事業を建
て、くれあしたに、昨年急病で死
に孫や嫁は思へは来てくれず、
私も一人ぼっちで淋しく~~世~~めて道
楽者でも血を分けた~~界~~弟、それ
に嫁に由緒ありぬ、どうかして帰
せと下さし、旅費や小使はいくら
でも送つてやります、却船會社の
船や船でも送りますから、どうか此
通り依頼の通りと云つて老いの
眼に涙を~~流~~^落し、二つの白髪頭を墨
にすり替けて頼むの正ありた。
私は心の中を嘆息し、義憤
に燃えた、「よろしくお望みです、
力十~~分~~と言つても~~少~~うせしき

心近くにいるのと同じよう、どうに
てもしと探し出し、印符は僕が買
つて使ひも持たせてやりあすよ
ろ一いやだと言へば領事館の手を
借りても返す世です、と私は確
と約束して帰加し彼方へ入った
ト、に此案が成る事と見付
^部う事柄を細細に話した、彼れは
帰らぬとは言はぬ、古井トや道
央を賣つて帰ると言うて其端は価
水た、私は其後、自分の自動車に
三、四日中彼れの問題を走り廻
たが言を打ち出してどうも、誠意が
見え、二週間過ぎと一ヶ月経て、ス
トップトの友人から、長距離電

(5)

に依ると、N老人は禁澳区域に鯉
取りとして某警察に拘留されて居る
と書きたる、私は又た五十哩を飛
留せて行つて署長に「老人を日本
へ帰すのだから」と言つて身柄を
貰ひ受けてステバーストに返した
其時ボートの買人が居るから賣り
に行かうが、ガッリ代を貸せと言
つて十五弗貸してやつた、其が不
りして何処迄走つたか、行衛知れず
開戦、日本人の移動の網にかゝつ
て、それが夕ミの犯罪者の収容
所に居るの事ある、

此の東札付き達が相當数居る、
大々東建物内は、四、五十人が宿

(6)

台をクルリと壁に沿って並べてある。二個の鉄の油樽を付けたスト
ーブの上には湯沸しが蒸気を吐い
て居る。長蛇の西方に三呎に六呎
位のオテーブルが二個あり、其周
りにはクルリと七、八が置かれてあ
り、それに十四、五人の荒くれ男
が四、五十以上ばかり陣取
つて、二組の賭場の開帳して
居る。金の多い連中は腕組みし
たり、遊び人の間から顔を突き出
したり、後からカードを見て歓声
を起し、立ち上りて見て居る。すると
荒々しく声を聞けて、大声でドナ
リ、ドナリ入った男は、何処かお米の

の汁にありついたらと見え、其の上
様嬢で、他人はゆゑに迷惑でも
自分一人は愉快である権利がある
と言うた風で、室の~~中~~をあちち、
こちちと、タリリ廻つて居る、誰
か、何ふの帷を引を~~廻~~くたゞすド
の中から「オイ、明日は休むに行
く人も居るんだ、もうエーカサレ
にせんか！」

とある音がする、だが勝敗
を争ふて居る連中は、全意識的に
時々大声で歓声や嘆息を發して居
る。此れは日曜日午後~~四~~十時頃の光景であ
る。中にはベッドの中を或年が居る

⑦ 古い講談本を讀んで居る者、男中

と誠に費用に毛糸の編みのをとして
居る者、何かコッ（^年）細工をして
居る者、あといち居る、彼等は手放さ
せ知らず、早く故郷へ帰つて妻子
に会う日を待つて居る（^{早くして}）
中東の事ある。

私の知つて居る連中の中に故郷
の敗戦、日本人送還、日本玉土に
食物が不足して居る等々の非常感
念を与へ多く、バクチに勝てば米の
計を漁り歩き、敗けては一文に成
れば、カチ外政府の給子喰を喰ふ
て、宿て起きて、他人のバクチを
口を聞いたまゝ見とれると言ふ所
をあたりにバクタリの連中が十指で

送り送り程居る。

私が行つて居る間にも、妻子を持つた途中が犯人、此の犯人者の収容所に迷ひ込んで来るのを見た、彼等由退屈環境にか、小使儲けにか、やつて来るの亦さうだ、俄と疏るに妻子を持つ程の人ほ慨しと世帯ハクが多いとある。

私の知つて居る未婚の青年と云つても四十才を過ぎた男だが、附近の製材所を一日七、八井由儲かる位をさと夏中儲けた金を、夕マの頃の収容所へ全部奉納して、雪が降つて休むが無くあると同様に、食料の金が無くある、かと

言つて三度の食事を廃止する事は
出来ぬで結局他人や會社の厄介
者と成る連中も二、三ある口

此の人達が皆日本に帰るの事あ
る、初敗戦の祝玉では、満鮮から^{その他}
丸裸体同胞を追い返された數十万
の同胞^{が帰る}に日本々土の戦死者
全人口の六分の一即ち約一千万人
都市の爆撃されたるの二百万戸
焼失家数二百万戸、
日本の政府が魔術使ひで金に限り
米、麦を生産する若者なき農家が
一千万の不生産難民を養ふ、ア
メリカ、カナダから帰った敵民共
をどうして養ふて行ける事ある

おか、心ある者の胸はうたぐり

イェタレ、後家の収容所、

彼の女華の身人は開戦と同時に

官権に束かれて抑留生活して居る

者の家族、移動に關して官憲^憲の

命令に服せしむる所、主張つて「抑

留せられた者、日本政村は被抑留者

に——万弗がい、文給あると云ふ嘘の

柳東雲の言はる信じてとか、どうか

何等の反税の理由^{敵を撃つ事}あると云ふ、^{忠義と勇気}反抗抑

留せられた者などの妻、此の気の

毒、お婦人達の中には二世を日本と

言ふものを知り、友人と共に

に日本に送らる人も居る、若き

二世女を愛する子供を二人三人、

抱いて、夫の出所を待つて居る高
 、司法大臣に陳情して主人を釈放
 して貰ふ様請願運動して居る人も
 ある様だが已に終戦の今日抑留日
 本人の苦慮を如何に決定するの
 か、輿論は「好ましからざる移民」
 としと送還を政府に要求する細
 き中あり、政府の方針もそこには
 ちるの事は無いから。
 いふれにせよおよい女半匹一
 家の荷物一切から子供の世話をや
 つて行くのだから一通りの服装を
 はあるまいと同情される。

収容所内ではこうした風潮をイ
 ンターミット後家と言つて居た、何し
 ら二十歳から四十歳位の迄の婦人が
 多いのは生理的何とか言ふものに
 悩むのは自然ではあるが、三年
 半の間に二、三件、好ましかうざ
 る事件が起つたのを見て一般には
 上成績であつた、何端表面に出る
 の由のは神ありぬえの知る由もな
 い、私は「戦時」収容所「性道德」
 東と論ある ~~國語~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~い~~

轉住所を見た二世

一九四五年四月力十が政府は、在

加同胞全部の「戦後日本に帰るか

、力十がに居たいかに」ついに、^{調査}米軍

を、たのてある、其頃には日本軍は

破竹の勢を敵を撃破して居るかに

宣傳され、日本の物資の欠乏中人

力の不足も、食糧の^{神給}維も全然

在外同胞の耳には入つて居るかつ

たものがある、日本は勝つ！と信

じて居た人々が多かつた、英

字新報を見ても居るものは、どうも

義果あとは、どうも大勝利

で、時には日本大空軍発表の敵の

損害（例へば大海戦の）艦船数

と、米軍側の発表する日本の^{損害}艦船

38
数が同数あるが多い、どうかを信
用しきよいか判らぬ時も、どう
してもヒキ目に大に害發者に嘘
は多いと言ふ。一世の言を信じると二
世も日本が勝つと信じて居た者が
多勢居たらしい、

一 二方カナダの領政村には、過去
三十年来、日一と一が治岸や、フ
レチー紙地方面で日本人問題が預
知癌の柳に成り平時、それが解決
の方法は預知癌望とされて居た問
題と戦時法の發動を好機とし、
日本人の経済的發展の基礎を根底
から覆へし、剩（戦後は皆日本へ
送り還して、三十年来の宿病を

大切解全紙を寫りたる下心を、「
單に日本へ行きたいか、カナダに
止まりたいか」を卒業と登録させ
るゝと云ふ、日本行きには運賃も
政府が支辨してやる、金も財産は
全部持つて歸りす、即ち日本へ
行く者には所内での取扱上凡ゆる
便宜さゝるゝ、此一州何處
へでも言ひの通りへ行かせる、
と發表し、カナダに泊まりたり人
々はタメには選りぬ、口々
以来へ移動するか、或は本部に仕
事の出る迄、他の収容所に待
ち合はせろ、此一州内には言
ひの通りへは出られぬ等々を

吾等の二世は、カナダ、憲法に
カナダ人であり乍ら、日本と親と
共に帰るか、カナダに居るかにつ
いての決心を表明せねば成らぬ事
に成つた、此の旨題は政府から二
ヶ月も前から、預告があつたのを
個人的に考へる時日は充分与へ
る多量に与へるが、自分自身の
将来と現在から自己判断に依つて
決定とせん、それは何も迷ふ可き
く問題は簡單であつた、とあるが
、どうも自分の問題を自分と判断
せぬ、世上の流言蜚語に迷はされ
、それに個々の身の上の事情に依
つて決定する問題を國体と、研

究したり、計議したりして、増々
疑心暗鬼を醸成して、階限なく迷
ふて、度々のつとりは日本行きに
署名して現在の特典を得^るやうに署名
あると後とろろにか成らうと試みる

にも署名した二世が沢山居た。
日本行き署名者及び其子供(以下)一万三千九百人内三世約三千九
百九十人
白本が敗戦と成つて滅びし
た九月二日以後に、夕乙メ収容所

(日本行きばかりの人々)の二世
七割以上は日本行き署名取柄しの請
願をした。此の一事だけ西中余り
に自己判断に頼けて居るかい判る
、それは一世の罪だと自分ば懺ふ
、彼等は公立学校に教育を受けて
居る力十人東の如あるが、放課

42
語学校や家庭を以てんを感化を愛
けたか男の中心に過ぐるものか
う、それと一世はとうも二世に
物事を委せつさりにとるべき習慣
慣があつた、青年會、少女會など
を作つて中力な形式に遺風は少年
少女達に自治の訓練をせよ、自分
の問題は自分でお片付ける習慣を作
る様に指導せよのだから、日本人一
世は自分等の思ふ通りの型通りに
指導して来た其癖があるのとある
、他人の顔色ばかり見て、牛の上
歩下歩をとり来た癖が今もまだの
りである、だから迷ふのとある、
日本敗戦開港九月二日から正に三

(43)

ヶ月の今日、未だに署名の取返し
 清款をしようかしらいかと迷つて
 居る連中が少数ある、

署名とやうかしらいかと二ヶ月
 迷ふ點上を、せつぱつて署あ
 したものの、又不安に成つて署名取
 返しやうか、しらいかに三ヶ月も
 迷つて居る、佛教を教へる三金の
 川や六道の辻へ行くにも迷ひ迷ふ
 と死ぬるやあうう人は迷ふるに
 は生糸の訓練が備へて居るから、
 未だには徹底的に迷ふやあうう
 一九四五年一月現在

署名者続数 一〇、三九七

在留希望者

ビレー	四〇〇〇
アルタ	三六八
サスカケ	一五五
マニトバ	一五五
オタワ	三〇〇
クベク	一五五
マニトバ	一五五

